
Dorp! Trap? Tri p!

煎茶煎餅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D o r p ! T r a p ? T r i p !

【Nコード】

N 6 5 2 3 P

【作者名】

煎茶煎餅

【あらすじ】

酒飲んで起きたら知らない天井。とりあえず間違いで死んだらし
いから次人間になれる順番待ちをかねて創作世界に転生しつつ時間
をつぶすことになった。はたしてどうなるのかっ

処女作。ノリと気ままに嫁と旅する話を書きたくなったので書いて
みることにした。テンプラの転生物。一応チート予定？　そこまで

俺TUEEEする予定はありません。いろいろな世界を渡っている予定。ただ予定はあくまで予定であり未定で決定。

設定？（前書き）

すいません、ちょっといろいろ説明不足な点など多すぎ&キャスコの能力値が大体決ってきたため、まとめとして設定を書いておこうと思った次第です。

こんないい案があるよ的なのは随時受け付けてますのでぜひぜひよろしく願います（n・A・）n

設定？

主人公 初期値（括弧内が現在数値）

名前 世界によって入れ替わる相手によって代わってくる。（真名募集中）

能力

筋力… D

耐久… D

敏捷… D

魔力… D

幸運… C（※B）

【保有スキル】

吸収 A

相手を倒した時、相手のステータスが自分より高いもので更にその中で一番高いものの何割かが吸収されていく。条件はどのような形でいいので戦闘に参加すること。参加方法により上昇割合が増える。異世界チート部分

学習能力 EX

このランクでも見稽古は不可能。自発的に行動（体を動かすなりのアクション）することによる学習経験値が常に最大となる。ただ覚えが良くても才能の限界で最大値が決まる。（もし体術 A が才能限

界であればAが最大値になり、それ以上はいかなる努力でも超えることは出来ない）異世界チート部分

気・魔力・それ類する物 EX

まったく使われてないので本人すら忘れかけている。形だけのEX。キャスターの大魔術連発もこれのおかげだが・・・

異世界チート部分

※現在の話の状態で、ライダーに勝ったため、彼女の最大値であった幸運EXの吸収補正が入りました。ただマスターとしての戦闘参加のため一段階分上がりました。

サーヴァント

クラス キャスター

真名 タマモノマエ

能力

筋力…C

耐久…C

敏捷…D

魔力…EX

幸運…C－（※B＋）

【保有スキル】

陣地作成C

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。

が、どうも性格的に向いていないらしく、工房を作ることさえ難しい。

呪術EX

ダキニ天法。

地位や財宝を得る法（男性用）、権力者の寵愛を得る法（女性用）
といった、権力を得る秘術や死期を悟る法がある。

しかし、過去さんざん懲りたのか、あまり使いたがらない。

変化A

借体成形とも。

玉藻の前と同一視される中国の千年狐狸精の使用した法。

殷周革命（『封神演義』）期の妲己に憑依・返信した術だが、過去のトラウマからか、あまり使いたがらない。

吸収A

相手を倒した時、相手のステータスが自分より高いもので更にその中で一番高いものの何割かが吸収されていく。条件はどのような形でもいいので戦闘に参加すること。参加方法により上昇割合が増える。異世界チート部分

※現在の話の状態で、ライダーに勝ったため、彼女の最大値であった幸運EXの吸収補正が入りました。直接戦闘参加経験値のため、生い立ちの性質上付いていた一が消去され1段階と十が加算されました。幸せになってほしいです。

細かい設定について

F a t e / s t a y n i g h t S e r v a n t D a t a b a
s e 様の部分抜粋

ランクの関係 数値は「F a t e / s i d e m a t e r i a l」
パラメータールール参照

瞬間的な力関係はE X > > > A + + > A + > B + > C + > A > B ||
D + > C > || > E + > E かな。

一の説明がされてないのですが恐らく半減だと思われます。十は瞬間的に倍加で通常では、次のランクに劣るらしいです。

吸収の詳しい設定の詰め

雑魚を倒しても吸収はされません。ゲーム上のレアエネミー（ボス）
以上でないと加算されません。

吸収例 $\langle\langle EX \rangle\rangle$ を吸収の例 どの場合でも一段階強制UP（
例 $A \downarrow A+$ ）。－（半減）が付いている場合消去。A以下で吸収が
入った場合＋による一時ブーストがつく（ $C \downarrow B+$ ）。

設定？（後書き）

追加があればどんどん書き足していきます。

n いい案、アイデアがあればぜひ投げつけてください（n・A・）

文章指摘もどんどんお願いします（・A・U）

プロローグ（前書き）

ついノリで処女作書いてしまおうと思った少し前の私が憎い。その気の迷いのまま突っ込んでる今の自分も憎い。文才もないですが読んでいただけたら幸いです。

プロローグ

S i d e ?

最近、どうも忙しくて趣味に割く時間がなかなか取れなくて俺の寿命がストレスでマッハみたいになってる。

”大丈夫だ、問題ない”とかいいつつ誤魔化しながらやってきたが、あれはやっぱりだめなフラグだったようだ。

兎に角ちょっと限界だったので（まだまだ限界じゃないんだけど）むしろくしゃして仕事を投げ出して逃げてきた。後悔はしてない。

そんなこんなで居酒屋で一人で飲んでいると、ふと見知らぬ男から声をかけられ一緒に飲むことになった。

最初はまあ自分も一人で飲んでてもあれだし、程度に飲んでいたらすごく話が合った。

お互いの愚痴を聞いたり、趣味の話で盛り上がりたりしていた。

自分は酒が強いほうだと思っていたがだいぶ酔っ払ってきたのと、横の男を見るとまったく酔った素振りを見せずさらに「大丈夫か？」と心配されてしまった。

なんか悔しいとかわけがわからない闘争心に？き立てられ飲んでい酒をぐいっと一気に煽り

「大丈夫だ、問題ない！」

「いい飲みっぷりだ！俺の速さについてこれるか」

とその男も持っていたお酒を飲み干した。

その後ついつい話も酒もヒートアップして、二人一緒にいろいろなお酒を一気したりとかなり無茶な飲み方をしていた。

そしてトイレに立とうとした瞬間急に世界の向きがかわり、そのまま意識が途絶えた。

その意識が途絶える寸前

「あ。やばくね？」

とかいってるのが聞こえた気がした

S i d e o u t

プロローグ（後書き）

ご感想・指摘などがございましたらぜひぜひO R Z

1 話目（前書き）

いきあたーりばったーれ。どうなんのこれー。自分が一番知りたいです。

とりあえず本筋まで突入したい。

1 話目

目が覚めた。目の前に広がるのは知らない白い天井。

「知らない・・・天井・・・」

お約束は言っておくべきかなと思いつつも、やっぱり言っておいて自己嫌悪で死にたくなってきた。

「あれ。昨日あの男と飲んでいて・・・トイレに行こうとしてどうなったんだっけ・・・？」

云々と唸っても何も出てこない、とりあえずこれ以上悩んでも仕方ないし現状確認しよう。

白いしここは病院？

それだったら人生初救急車体験を起きて乗れなかったのは悔しいな
ー、とか思いつつ体を起こし目に入った風景を見て

「ひょえ？」

自分でもあふおな声が出たと思った。

ただ白かった。世界は白かった。

トンネルを抜けるとそこは一面の白世界でした的な、なにか感動があった（ないけど）

そこで「目が覚めたかい？」と唐突に声をかけられた。

探すと、昨日一緒に飲んだ男が昨日の格好のまんま何故か檻にはいりながら書類を片付けていた。

「いよう！」

（。▽。）。こんな感じでいわれた。

ぽかんとしてると、その男は続けた。

「ざっと説明しちゃうぞ。昨日飲んでトイレ行こうと立ち上がった瞬間にそのままぱたんと倒れて泡吹き出したんだわ。で、救急車を急いで呼んで運んでもらったんだけど、近くの病院が全部埋まってる、どこも受け入れてくれなくてそのまま死亡。ほら最近よくある盥回し？だっけ受入れ拒否で死んじゃうやつ。」

あー、納得したけど納得できねえ・・・

思わず頭をかかえてしまう

「説明続けていいかい？」

（どうぞどうぞ）

「じゃあ続きなんだけど、実は君は死なくてよかったんだ・・・」

（あーてんぷらてんぷら・・・）

「テンプレいうな。ってかずいぶんあさっりしてるな、もっとこう激昂するかと思ってた。」

（いや。なんかある程度そうなんじゃないかとか思ってたから割り切れた。それに面倒くさいしさっきから頭の中で思ってるだけだろ）

「ホントだ。いや、まあうん・・・こうお前何者だ的な展開を期待してたんだよ俺は！」

（テンプレ乙wwwwwwテンプレ神m9wwwwww）

「あまりの馬鹿にされっぷりにショックなう・・・」カタカタと携帯を打ってる天麩羅神

「まあそれでなんだがお詫びに転生させようと思ったんだが、さっ

き言ったように死ななくてもいいのが死んじゃったからさ君が住んでた地球とかには転生できないんだよ。魂の順番待ちの問題で割り込んで転生しちゃうと魂の質のせいで次に生まれるものが決まるんだけど、たぶんそうなると次はヘビとかあの辺の爬虫類の何かになるんだよ。そっちのほうがいい？」

（ちょ、それは確かに勘弁・・・）

それはさすがに俺でも割り切れる範疇を超えている・・・

「でそ、だから君には時間つぶしと俺の暇つぶしのために創作世界、いわゆる漫画・アニメ・エロゲの世界を転生してきてもらおうかなーと。」

（なんでもござれだな）

「いえあ。次の場所はサイコロ振って適当にランダムに決めるから。適当に魂の質上げてきたらその分早く人間に戻るよ！」

（マジデ！ちょっと頑張る気は出てきた。なんか特典とかないん？）

「一応精神が磨耗しないようにとは思ってるけど、他に物によるけど3個聞くんよ？ 一緒に酒飲んだ誼とお詫びに。」

（じゃあサーヴァントさん連れて行けない？エクストラのキャスタ―玉藻さん。

後、特別な能力とかはいらないから学習能力・成長速度を上げておいてほしいかな？

3つ目は倒した敵の能力とかステータスちっくななにかを吸収できる概念をキャス子と自分に付けて欲しいな。）

「最初の二つはお安い御用だ。吸収についてはそのまま吸収していくという問題があるから倒した敵の何%分が入るようにしよう。後、学習能力あっても使えないと意味ないからその辺の才能の下地と気や魔力などは鍛えれば鍛えるだけ最大値が伸びるようにしておこう。」

（おー太っ腹ー）

「ではこれくらいかね？ いや最後にはんとすまんかったな、この檻から出られて、転生したらまた飲みに行こう。」

（ああ、聞きそびれてたんだけど、その檻はどしたんだ？）

「H A H A H A、仕事を投げ捨てて下に降りて酒飲んでたら、この問題起こして嫁に捕まったorz」

（南無エ。天麩羅神エ・・・）

「ありがとう。微妙な優しさが心にしみて汗が出てきたわ・・・。
とりあえずサイコロ振るから頑張れよ！」

からころ。数値は4だった。

「4マス進むっと」どこからともなくスゴロク出してコマを進める
天麩羅。

「テンプレだと落ちるのが主流だけど、どうなんのこれ？」

と天麩羅神に向き直ろうとしたら横から来た何かにブツ飛ばされて
俺は飛んでいた。

「ちよ、ま・・・」

落ちるんじゃないなくて飛んでいた。

大事なことなので二回言った

ひゅーんぐしゃ。俺は死んだ。スイーツ（笑　とかになるんですけどこれ

いやマジでやばい・・・全身から冷や汗出てきた

「馬鹿め！横からくるぞ！」とか天麩羅が叫んでいた

「あほかああああ。おそいわあああ」

そういいながら俺は飛んでいった。

そして気づいた

「あ。結局どこいくの？」

1 話目（後書き）

文才はどこー？探し物は近くにあるらしいけど、どこにも見当たりにません。これでしょうか！

駄文 g d g d だけのんびりやっていきたいですしおすし。

文才こっちへこい！

ご意見感想指摘ぜひよろしくおねがいします。

2話目 ここはどこ？私はだれ？（前書き）

やっときた。∇。ゝゝ

はいれたよはいれたよ！

クリスマスイブでも私の生活リズムは崩れません余裕です。

2話目　ここはどこ？私はだれ？

ざわ・・・ざわ・・・

む、転寝をしてしまったようだ

転生させるとかいつて飛ばされたんだが・・・ここはどこだ？

というかこの起き方だったら飛ばされた意味はなくないか？

軽く頭を振りつつ現状を把握しようと周りを見渡そうとして後ろから声をかけられた

「おいおい、ようやくお目覚めかい？　仮にも僕の親友なんだからしっかりしてくれないと困るね」

そんなことを言われ振り返ってみると、そこには二枚目半々三枚目くらいのがいた。胸元も微妙に開いていてちよつとナルシーっぱかった。

なによりこんなのと親友になった覚えは一寸たりともない

「どちらさまでしたっけ・・・？」

思わず素で聞いてしまった

「お前ふざけてんの？ ハッ、いやついにバカになっちゃったのかい、僕は慎二、間桐慎二だよ。寝ぼけてんなら顔でも洗ってきたらどうだい？」と鼻で笑いながら言われてしまった。

元からバカですけど一応大丈夫です。一応記憶あります

てかうそん、あのワカメかよ。ってことは士郎ポジ？ やだよ、心臓さされたくないよ？

おk、とりあえず死にたくはないので現状確認およびナルシスト回避に鏡でも見に行くか

わかめがあそこまでマシ？ になってるのなら士郎の顔がどうなってるのか気になる

「ああ、すまん。とりあえずちよつと顔洗ってくるよ」

そういうつつ席を立ち、そのまま外に出た。

後ろから「やっぱ、あいつは僕がいないとだめだな」と やれやれと言った感じの言葉が聞こえてきたがスルー

ワカメいつかそれ？いでやる
覚えてろ

とりあえずトイレで確認してみると、どう考えても士郎じゃない。

あんなにキリってしてない。どっちかっていうとボケーとした、というかちよう平均的なお顔。

前世の泥団子のような顔に比べればDANZENでしたがね！

自虐へと脱線した頭を元に戻してまた考え始める、傍目から見たら鏡の前でうんうん唸ってる変な人、やばいワカメと同類とか見られたらどうしよう。ああまた脱線した

なのにワカメの親友ポジションとかおかしすぎるだろ・・・あれは取り巻きいたけど男友達皆無だった気がするし

後、天麩羅にキャスター頼んだのについてこないし・・・

って、あ

これエクストラの世界か

あー、それなら納得できるわ

いやでもキャスターくれって言ってエクストラの世界飛ばされるならサイコロ振る必要なかったんじゃない？

そんな考えが頭を過ぎったが、ご都合主義ですねわかりますとメタ発言しつつ考えるのをやめる

まあキャスターが好きすぎてキャスタールートだけは3週くらいしてるからなとかいけるはず・・・

原作介入して狂ったらわからなくなるけど、キャスターへの愛でなとかいける

とりあえず、親友ってことは予選ってことだから本選に進まないと

でも早く行き過ぎるとトワイヌに目を付けられる可能性があるな

とりあえず、教室戻って生活が続けて様子を見るか

教室に入ると、レオが出来杉万能人間をやっていた

ということはこれは最終日？ か

いやならある意味ラッキーと考えるべきか

4日も日常生活はさすがに限界感じる。主に作者の技量的に

なにやら信二の周りにいる子たちも皆レオのほうにいつてるため、
信二の機嫌が極悪だった。

さらにずっと悪態をついている

それに気づきレオがワカメに謝罪する。（おー原作通りなのか

生で見るとますますわかるワカメの小物具合。まじやばい
顔色の変わり方がすごい

そして授業中レオが突然立ち上がり、お別れを言って外に出て行っ
た。

そして不自然ながらも自然に再開される授業。

ワカメが「トイレいくなら普通にいけよ」とか悪態をついていた

そんなわけがないだろうに・・・

そうして放課後を迎える

これが最終日ならレオについていけば本選へ出られる

廊下でレオを見つけたので後を付けていくことにする。

すると前にはもう一人レオを付けている人がいたので、自分は少し後ろから隠れてついていった

そして行き止まりでレオはついてきた前の人に向かって

「僕のいるべきところはこのではない、行くべき場所があるんです。寄り道は寄り道、いずれは本当の道に戻るときがくる、それが今。そして僕はまたあなたに会える気がする、だからここではまた今度、というべきですね」

そして去り際に「貴方達にも幸運を」といって壁の向こう側へ去っていった

ばれてました。

前の人が壁の向こう側へ進んだので、俺も進むことにする。

あれ・・・でも確か主人公だとその日無理やり一成を突破して授業を受けていた

そして放課後レオの後を付いていく記憶だった

が、どうせご都合主義だろうと気にしなくていいだろう

と深く考えずに壁に突っ込んでいった

それがどう関っていくのかはまだこのときは知る由もなかった

2 話 目 ここはどこ? 私はだれ? (後書き)

ぎゃー駄文すぎるー

ほんとgdgdですんません

伏線の張り方が下手すぎて自分を消したい

ご意見感想指摘お待ちしております

3話目 問おう、貴方が私のマスターか。 いえ人違いです（前書き）

※業務連絡 クリスマスは中止です

3話目 問おう、貴方が私のマスターか。 いえ人違いです

S i d e 主人公

というわけで行ってきました

ここでチュートリアル受けて進んでいくんですね、わかります

というか確か一度死に掛ける必要なかったけ・・・これ・・・

まあキャス狐と共にいけるなら多少は我慢しますとも！

というわけでこの味気のないお人形さんと一緒に進んでいく道中はチュートリアルということもありサクサク進んでいく

ゲームでは戦闘は1ターン6アクションで3竦み＋スキルというものだったが、こっちではそんなことはない

ただ相手の行動がうつすらとだが読めるようで、これならなんとかなりそうな気がしなくもない

あれかゲームで敵の行動が読めていた部分がうつすらと感じさせる

のか、それともこの電脳世界上で無意識にハッキングをかけているのかという考察をしつつ進んでいった

そうして問題の場所にたどりつく

原作でいった息苦しさすら感じる荘厳な空間という表現が身にしみてわかる
とても肌がぴりぴりする

そしてふと横をみると先ほど自分より先に入っていった生徒が死んでいた

南無
エ

そして原作通りだと出来レースをさせられるわけだが、そうはいか
んざき！

と思ってた時期が私にもありました、アッー

やはりこの場では読めないようにで指示を出すも負けてしまう。

とりあえず原作通り倒れた振りでもしておきましょうか。

「……ふむ。君もだめか。そろそろ刻限だ。君をもって最後の
候補とし、その落選をもって今回の予選を終了しよう。」

と何処かから聞こえてくる。これってマーボーなのか？ それともトワイヌなのか。

ちよつと予選のとき4日目から参加の弊害かまーぼーの声がわからんもしマーボーがジョージの声なら俺掘られてもいいわ・・・

とかばかなことを考えてたら

「さらばだ。安らかに消滅したまえ。」

そう言い放たれた。

だが断るっ

だがそんな思いとは裏腹に体全体が重くなってる

頭も痛い

頭が頭痛

頭が頭痛で痛い

だが俺は！

キヤス狐と共にいくんです！

このまんま根競べで耐え切ってみせよう！

というかあの神殺す、くれるんならもう少し楽な渡し方があるだろうに！

「その魂、ちよお~~~~と待った！暫く！暫くう！」

あ、やっときてくれたようです。空気ブレイカー。

「どこの誰とかかぜーぜんぜん存じ上げませんが、その慟哭！その頑張り！他の神様が聞き逃しても、私の耳にピンとききました！」

慟哭って頭が痛いあふおのこ三段活用のことかな？

「宇迦之御魂神もご照覧あれ！この人を冥府に落とすのはまだ早すぎ。だってこのイケメン魂、きつと素敵な人ですから！ちよつと私にくださいな♪」

その言葉とともに今までの場所に光が灯り、硝子が碎けた

そして残ったガラスの近くに人影が現れ、こちらに向かってくる

あのピンと張った狐耳！

ぷりちーな尻尾！

我らの嫁、玉藻ちゃん！

「請われはなくとも即参上、軒轅陵墓から、良妻狐のデリバリーにやってきました！」

請いました、デリバリーまってました

「あ、なんかドン引きしてませんか？ えーと、あなたが私のご主人様……でいいんですね？」

ハッ いかんいかんトリップしててドン引きしてると勘違いされた。

誤解だということを告げなければっ

「いや、すまん。」

そういった瞬間何を勘違いしたかキャスターは

「ちょっ、ひど！ 空気よんでください！ ここで私と契約しないとデッドエンドですよ！ 人生負組でいいんですか！」

と物凄い勢いで迫ってきたので思わずうなずくしかできなかった

キャス狐、なんて・・・恐ろしい子！

「イエス、そうでなくっちゃ！」

誇らしげに尻尾が動いてるのがなんともかわいい。やばい戦争始まる前に萌死できるかもしれない

そしてキャス狐に手を引かれ立ち上がると、握られた手に少しの痛みを感じ見てみると令呪がついていた。

ひゃっほうと喜んでるのも束の間

後ろからさっき突っかかってきたお人形さんがこっちにやってきた

キヤス狐が張り切って空中バク転して

「あんな益体もない木偶人形、塵も残さずに、この世より根絶させておきますから。」といい放ち木偶人形に向かっていった

ちなみにパンツは見えなかった、戦闘中に期待するでしょう

そうして戦闘だが、確かキヤスターはひ弱だったはずだから時間かかるし、エクストラアタックが起こればパンツ見えるかなど思ったら

ドゴンッ

すごい音がして一撃で勝負が決っていた

「ほえ」思わず口からまた変な音が出る

「あらあら？随分とかわいらしいお人形さんでしたねー、まあご主人様に楯突くのが悪いんです！」

そう言いつつも、キャスター自身も多少びっくりしてるのか、尻尾が？マークを作っていたが

とりあえず訳がわからないのでキャスターの頭を撫でておいた

主人公はナデポを行った！（76%の確立）

ナデポ成功！

キャス狐は赤くなった！

なにやらキャスターが恥ずかしいことをいろいろ言っていたが、その声はろくに入らずに考察に耽っていた

威力がおかしい

本来なら初期値はALLステータスFでダメージがお粗末な記憶があったが・・・

今のは後半、最終戦くらいの威力がある気がする

いや、とりあえずここではこれ以上の考察は無意味だな

詳しくは教会が空いてから確認するか・・・

考察に耽っていたせいで、どこからともなく聞こえる声すら無視していたようだ

「……………届いている。”光あれ”と。では洗礼をはじめよう。君にはその資格がある。変わらずに繰り返し、飽くなく回り続ける日常。そこに背を向けて踏み出した君の決断は生き残るにたる資格を得た。しかし、これはまだ1歩目にすぎない。歓びたまえ、若き兵士よ。君の聖杯戦争はここから始まるのだ。」

疑問に思うことはないのとおりあえず聞き流してたら、聖杯の説明はなく

「聞け、数多の魔術師よ。己が欲望で地上を照らさんと、諸君らは救世主たる罪人となった。ならば殺しあえ。熾天の玉座は、もっとも強い願いのみ迎えよう」

お上の声に飽きてきたので、なでなでを止めて良妻狐さんを観察していると、尻尾が微妙に期待してるかのようにぱたぱたしてた

やばい尻尾ポされる

ああ、また天の声（笑）を聞き流してた

「君の決断は見せてもらった、もはや疑うまい。その決意を代価とし聖杯戦争への扉を開こう」

その言葉聞いた直後また体が急激に重くなり意識はブレイカーが落ちるように途切れた

S i d e e n d

3話目 問おう、貴方が私のマスターか。 いえ人違いです（後書き）

とりあえずこのようになりました。

キャスターさんきました！

あれの転生がきつと琥珀さんだと信じてやまない
しかし琥珀か翡翠かといわれると翡翠派。

どうでもいいですね。すいません

ご意見指摘誤字などがございましたら、お願いしますorz

良妻狐を書いていたらクリスマスなんて中止でも問題はなかった

4 話目（前書き）

今回はキャスターとの考察の詰め部分です

1 回戦のワカメボッコはもう暫くお待ちください

4 話目

1 回戦 1 日目

段々と意識が復旧してくる

そして白い天井がまた目に入る

「これで、別世界の飛べたら気が楽ではあるんだけどなあ
割と切実な願いをぼそつと呟いていると

「あ。目が覚めたんですか？
よかったです」

そういいながら白衣を着た女の子が入ってきた
桜だろうか？

「ん。桜か？」

「ええ。はい、おはようございます。

体は大丈夫ですので、もうベッドから出られても平気ですよ」

ニッコリと笑いながら話しかけてくる

これがあの幸薄系腹黒少女なのかっ

見た目 だけ は清楚系すぎる

そんな失礼な思いは関係なしにどんどん説明していつてくださる

「セラフに入られた時に、預からせて頂いた記憶は返却させて頂きましたので、ご安心を。

聖杯を求める魔術師は門を潜る時に記憶を消され、学園の一生徒として日常を送ります。

そんな仮初の日常から自我を呼び起こし、自分を取り戻した者のみがマスターとして本戦に参加する――

以上が予選のルールでした。

貴方も名前と過去を取り戻しましたので確認しておいて下さいね。何かご質問などありますか？」

失ってもないし、取り戻してもないんですけどね

そういわれてつい

「大丈夫だ、問題な――――いわけでもなかった。」慌てて言いとどまる。この言葉には嫌な思い出しか詰まっていけない

「ルールは大体把握してるので問題ない。本選に出るにあたって個室みたいなものは譲与されないのか？」

答えは知ってるけども問題ないフラグを回避するために適当に聞いておく。

キャスターと話しておきたいし

「それでしたら言峰さんがこの聖杯戦争を監督されているので、こちらから説明がもらえるとおもいますよ。

他に何か質問がございましたらいつでもどうぞ。お答えできる範囲でお答えいたします」

と桜は答え、机に向かっていった。

体も問題ないらしいし、神父でも探しにいかうかね・・・

原作だったら目覚める前に夢を見させられたりするはずだったが、それに対しても何もなかったし

それにチュートリアルでのキャスターの性能にも気になる

ベッドから降りようとすると、一瞬周囲にノイズが走り、目の前にキャスターが現れる

「あっ、おはようございます。ご主人様！^{マスター}

よかったあ、ようやく目が覚めたんですね！」

ぴよっこぴよっこ揺れているぷりちーな尻尾もふもふしたい・・・

「ああ、おはよう。心配かけたようだな、すまないな」

挨拶と素直な礼は好印象のための第一歩！

「もう、ご主人様^{マスター}！がこのまま起きなかったら、誰を呪殺しようかと・・・でも、聖杯戦争の本選に合つて、本当よかったです！」

照れたように茶化しながらも喜んでくれてるようである。

「ところで、ご主人様^{マスター}！

聖杯戦争の事はご存知ですか？」

「ああ聖杯戦争もサーヴァントの事も概要は把握できている。」

この後に予想される言葉もわかっているので先取りさせていただく

「それでしたら大丈夫そうですね！

ちなみに私はキャスターのクラスです。

ちよっと扱いにくいですが、

ご主人様^{マスター}の足を引っ張ってしまったらすみません・・・

そしてどうか私のことはキャスターとお呼びください」

「こちらこそ、足を引っ張らないように頑張らせて貰うよ。

これ以上の会話はここではまずいな。とりあえず言峰を探しに行こう」

「そうですね。さすがご主人様^{マスター}！

では私は側に控えさせて頂きますので、御用がありましたらお呼び

ください。」

そう言って、また虚空に消えたが、言葉通り近くにいるのが感じられる

「あ、すみません。この携帯端末をお渡しするのを忘れてました。」

出ようとしたとき、桜から声をかけられ携帯端末を渡された
いろいろ情報が出せて便利だ

しかしセーブ機能はなかった。ご都合主義でもだめらしい

札を言って、そのまま言峰を探しに行くことにする

途中アリスと話したり、ラニと話したり、

屋上で遠坂にセクハラされて仕返しとばかりに苛めてみたり

まあその代わりに情報いただけたから手打ちとしたけど

そうしてぶらぶらしていると踊り場でマーボーを見つけた
相手もこちらに気づいたようだ

どこか皮肉げな笑みを浮かべながら

「本選出場おめでとう。これより君は正式に聖杯戦争参加者となる。私は言峰。

この聖杯戦争の監督役として機能しているNPCだ。

今日この日より、君達魔術師はこの先にあるアーリーナという戦場で戦うことを宿命付けられた。

この戦いはトーナメント方式で行われ「ルールは把握してあるから大丈夫だ。それより1回戦の相手を教えてくれないか？」

説明をぶった切って聞いてみた、なにやらちょっと不満げだった。お前は説明キャラだったのかよ・・・

「優秀なことだな、情報を手にしているとは。

この戦いは情報で精することになるだろう。

対戦相手は待ちたまえ、確認しよう。

——妙な話だがシステムにエラーがあったようだ。

君の対戦組み合わせは明日までに手配しよう。

それから最後にもう一つ。

本戦に勝ち進んだマスターには、個室が与えられる。

2-Bのクラスが入り口となっているので、この認証コードを携帯端末に入力してかざしてみるといい。

さて、これ以上長話を続けても仕方あるまい。

アーリーナの扉を開けておいた。

今日のところはまず、アーリーナの空気に慣れておきたまえ。」

予想通り相手はエラーで選出されていなかったか

言峰はそれだけ言うて去っていった

まだどこか不満げではあった

そんなに説明したかったのかよ・・・

個室でキャスターと情報交換する前にタイガークエストのフラグを立てにいったら

タイガーに竹刀をさがしてくるように頼まれたので、後でアリーナに潜るついでに探してくることにする

他にやるべきこともなくなったのでキャスターと打ち合わせるために2－Bに向かい認証コードを入力してかざしてみた

何かが接続される音がして、気が付いたら部屋の中に立っていた。ネットゲーとかのサーバーみたいに一人一人別のどこかへ飛ばしているようだ

考えようにはこれトラップですよね・・・

そこにはちゃっかり机を集めて座るところを作っているキャス狐。

いつの間に

「わぁ、ご主人様マスターと二人つきりなんてムーンセルも粹なことをしてくれます！」

何かあればここで話せば、誰にも聞かれることはありませんね！」

「そうだな、とりあえず情報交換はしておくか。まず真名を教えてくださいえるとありがたいのだが。」

「いやいや、ご主人様マスターに私の真名を聞かせるなんて恐れ多い！私のはただキャスターと呼びくださいまし。」

そういつて隠そうとするキャスター、原作だと誤魔化されるがそうはいきません

「んー狐耳だし姐己とか？」 お約束のダツキネタを投下してみる

「ちょっ！ご主人様マスター！」

ご主人様でもそのセリフは聞き逃せません！

あんな贅沢狐と一緒にしないでください！！」

尻尾が物凄く逆立ってる。そんなにいやだったのか・・・
ちよっと悪いことしたな・・・

「すまんすまん。玉藻の前に失礼なことを言ったな。許してくれ。」

深く頭を下げる

「いやいやご主人様、わかっていただけたらいいんです！」

私は誇り高き狐！あんな贅沢狐とは違うのです！

って……え……？

今なんと……？

面白いくらいに尻尾の動きが変わる

ふふんみたいな誇らしげな動きからビクッと尻尾が固まり、そのま
ま動かなくなった

「いや失礼なことを言ったな許してくれて言ったんだが。」

「その前です！」

「の前？」

「そうその前！じゃなくて言葉遊びをしてるんじゃないんですから
！」

あらぶるキャス狐

つい遊びすぎてしまったようで、荒ぶるのを抑え事情を説明し説得
するころには初日が終わろうとしていた時
納得してはくれたものの多少拗ね気味のキャスターがようやく口を
開いてくれた

「ようするに、ご主人様は私を望まれてこの聖杯戦争にこられたという訳ですね。」

でしたら私は何も言うことがございません。

私の望みはただ誰よりも幸せな良妻になりたいだけですよ、ご主人様に仕えること、それこそが幸せなのです。」

望まれて使えさせていただけるなど幸せの極み、この身が朽ち果てるまで傍に仕えさせていただきます。

不束者ですがどうぞよろしくお願いします。」

そう拗ねつつも照れながら言ってくるキャスターに見惚れながら

「ああ。こちらこそ不束者だがよろしく頼む。」

この甘い雰囲気を楽しみつつ、この聖杯戦争をどう勝ち抜いていくか悩んでいると

「キャー。旦那様ゲットですー！

ムッフ、これで愛の巣計画が一段と・・・！」

そう叫んですべてをぶち壊してくれるキャス狐であった
さすが空気ブレイカー

あ、やべ。考察したり、アリーナ探索完璧に忘れてた

4 話目（後書き）

遅々として進まない文章力に頭を抱える最近

とりあえずキャラクターの性能紹介

CLASSS キャスター

マスター主人公

真名 玉藻の前

宝具 水天日光天照八野鎮石

陣地作成「C」

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。

が、どうも性格的に向いていないらしく、工房を作ることさえ難しい。

呪術「EX」

ダキニ天法。

地位や財宝を得る法（男性用）、権力者の寵愛を得る法（女性用）
といった、権力を得る秘術や死期を悟る法がある。

しかし、過去さんざん懲りたのか、あまり使いたがらない。

変化「A」

借体成形とも。

玉藻の前と同一視される中国の千年狐狸精の使用した法。

殷周革命（『封神演義』）期の妲己に憑依・変身した術だが、過去のトラウマからか、あまり使いたがらない

詳細ステータスに関しては少々まだ不明ということにさせていただきます。設定考えてなかったとかいわないでー
ギャー物投げないで

メディアさんよりその他スキルが大幅に低いため
魔力と幸運を上昇させてあげようかなーと
幸せになってもらいたい
というより幸せにしますよ！キヤス狐さん！

後敵を倒したら吸収できる云々設定は普通に原作と同じくレベルアップ形式として採用します

ただし初期レベルは1なので成長度も半端ないです
ええ、この辺で最初に言ってた設定を持ち出してきますよ

文中に説明いれるのが技量的にムリゲーなのでこんな感じでお許し
いただけたら幸いです

ご意見・指摘・訂正などございましたら、どうぞお願いいたします。

5 話目

とりあえずなんとか機嫌を直すことに成功した

トワイスのことについても話しておいた

なぜ彼がキャスターのことを最弱のサーヴァントと呼んだのかいまいちわからず本人に聞きたかったからである（あ

こんな初期の信用状態が低い状況で話してくれるかなーとか思ってた後々聞いたら「将来の旦那様のためです！」と力強く言い切られた

なんでもトワイスの一番最初のキャラだったみたいであった。

何度も参加しているという風ではなく、本当に初回で右も左もわからずにある程度までは進んでいたらしい

だが不幸なことに3回戦でバーサーカーと当たったとかなんか。

そこで情報収集中にアリーナで敵の不意打ちを食らい木っ端微塵になっただけ

あれはひどくやられましたーとテへと言ったけど。しかし目が次出会ったら絶対ぶち殺すと言ってた

オンナコワイ

次は絶対守って見せます！ えいえいおー！ 空気ブレイクしてくれることも忘れてませんでした

目は変わってなかった

オンナコワイ

大事なことなので2回言っておいた

とりあえずキャスターと1回戦の情報に關してだけはやりとりをしておいた

ただ知っているというアドバンテージを隠すために、基本情報がないという装いにはしておこう

情報はわかっていても、やはり2度ほど様子見で戦っておかないと癖がわからないとキャスターは言っていた

それにイレギュラーのせいで対戦者がかわる可能性もあったので、それに過信しすぎないようにという結論になった

キャスターの能力値だが本人もやはり疑問に思っていたようで、その原因に心当たりはないようだ

かなり勝手な推測ではあるが最後に自分がやったエクストラのキャスターのステータスデータだけ反映されたのかもしれないな、都合主義的な考えで

まあ詳しいことは聖堂が開けばわかるだろう

そうこう部屋で話していると端末が鳴り響いた

見ると

・・・2階掲示板に対戦者を発表する

あーワカメだったらやる気がでねえ・・・

しかし見に行かないと誰かわからないので行くことにする

指示通り確認してみると

マスター 間桐 慎二

決戦場 一の月想海

やっぱりでしたー頭を思わず抱え込む。チュートリアル用ワカメか

そうしているとなんか慎二が話しかけていたが、反応がなく怖気付いているんだろうと判断して勝手に高笑いしてどっかへ行った

まあワカメなど目もくれずにチャキチャキやっていこう・・・

というかむしろ道中で出会ったときに潰して樂をしてしまうか？

3回戦くらいまでならスキルを全部当てることさえすればあの能力値ならもっていけるんじゃないか・・・

いやでもジャンケンシステムではないからどうなるんだろ

とりあえずアリーナでいろいろ試してみないと話が始まらない。

ぴるぴる端末が音をならしていたが、第一暗号鍵の通達だろう

そのままアリーナへ向かっていると、説明したがっているマーボーが見えたがスルーしてアリーナへ向かうことにした

ㄱ一の月想海ㄱ

最初のチュートリアルではなにかよくわからない骨とか浮いてる不気味な水槽なイメージだった

今回は電子の海、それか真っ暗な深海といったところだろうか
軽くアリーナ全体が見えないかと思いまわりを見渡してみたがあまり遠くまで見通せず、さらにアリーナ全体はかなり広いようだ

入ってすぐにふよふよと浮いている敵がいたので1戦やってみたが、出会ったときの戦いのように1撃で決つてしまい何を得るとかいう話ではなかった

巫女ーん！とか私今輝いてますう！とか場違いではあるがかわいい

キャス狐の声に癒されつつ

仕方ないのでワカメと出会ってそれで試そうとしてアリーナ内を探していたが・・・

キャスターの尻尾をもふもふして、ふざけないでくださいと尻尾で叩かれて幸せな気分になったり・・・

鳳凰の金の刺繍をしてあるマフラーを拾ったり・・・

その性能について調べてみたり・・・

調べていてわかったことだが、これはやはりハッキングといってい
いだろう。

プログラムを起動させることにより現状の状態に対して上書きする
？ 加算する？ といったような
感じがする

ようするに礼装はプログラムで使うと効果がゲームとか起動すると言ったよう
なものだろう

感じがするのは自分にはそのような知識がほぼないからである。一応どのようなものかは映画とかアニメとかの知識で持っているがその程度である。

余裕があれば遠坂ルートに入って多少のハッキングを覚えたいな。。。

結局ワカメと出会うことはなく第一暗号鍵を手に入れてしまった

あるえ・・・？

悩んでいるとキャスターがスツと傍によってきてあまり口を動かさずに

「実はご主人様、ふと思い当たる事があるんです。」

「む、どうした？」

「えっとですね、確かご主人様の情報によれば、今回の相手幸運のランクはEXでしたよね。それで対戦を避けるような行動を意識してマスターを誘導したのか、無意識化でマスターを誘導したのかはわかりませんが、結果合わないような取ってしまったのでは？」

「あー。敗退を避けたか。ユリウスの相手も戦わずして勝ってたとか言ってたし、その辺の事があるから逃げたのか。」

「はい、あくまで推測ですが。」

「なんて不完全燃焼・・・。」

「まあ帰るまでが遠足です！気を抜かずにいきましょう。帰り際に後ろからズドンとかは洒落になりません。」

「だねー。」

そういいながらアリーナを後にした

ちなみに慎二はマーボの説明を聞かなかったキャス狐ご一行だったため、キーを取っている間に入れ違いニアミスしていたため会うことはなかったらしい。

そうして恐怖で慎二は自分から逃げ出したと要らぬ自信をつけていたのであった

5 話目（後書き）

うわーうわー1日ずつかすすまない！

これ50話近くはエクストラってことか！

このままでは・・・！

少しずついろんな書き方に挑戦していきたいです・・・！

ご意見・指摘・訂正などございましたらよろしくお願いします

6話目 情報収集ではなく間違い探し（前書き）

前回のあらすじ！

キツネが欲しいといったら、あげるといわれてエクストラの世界に放り込まれた

第一試合の対戦者は予定どおりワカメだった！

しかし出会うべきところで出会わないワカメ。

この世界の設定がどうなってるか把握しようにも雑魚がキャス狐様に一撃で消し飛ばされるためどうなってるか把握できない！

そんなこんなで2日目終わった↑いまこちらへん

6話目 情報収集ではなく間違い探し

3日目

慎二と遠坂のお話をこっそり聞いてるなう

（情報収集のフリだけでもしておかないと怪しまれますしね、他の方々から目をつけられご主人様に害が及ばないようにするためにも、そして二人の愛の勝利のためにもおお）

キヤスターがハイテンションモードになっているのが微笑ましい

あ。言い負かされてる。

そろそろこっち来るだろうし隠れておきましょう

ワカメはやりすぎせたけど、遠坂にもっと上手に隠れないと意味がないわよなどと有難いご忠告をいただけたので、ありがとうと素直に返したら驚いて、調子狂うわなどと肩をいからせてどこかへ行っってしまった

あれがじゃぱにーずつんでれーって奴ですね、わかります

どこか違う気もしなくもないが、どこもおかしいところはなかった、

まる

あたりに誰もいなくなったのを確認してから

「おそらく手持ちの情報に変わりはないみたいだね」

「そのようですね、ご主人様。それでこの後どういたしましょう？」

「とりあえず当面は油断してもらっておいて、第二暗号鍵のときに仕掛けるのでどうだろう？　なんか僕のサーヴァンとの力を見せてあげるよ的な展開になりそうだし。」

「そうですね。相手の力量の様子見といきましようか。でもご主人様？」

「なに？」

「様子見ですけど、別にあれを「まったあああああ、それ型月作品だと死亡フラグになりえるからあうとおおお」むう。フラグは大事ですから仕方ありませんね。じゃあこっちでいきましょう。私の戦いが終わったらご主人様と結婚「もうわかっててやってるよねそれ」一世一代のプロポーズを途中でカットされるなんて」

ヨヨヨと泣き崩れるキャスター

なんか変な空気になったので狐耳と尻尾ももふもふさわさして誤魔化してみたら、なんか変な声が聞こえてきたので手を止めると寸止めなんてご主人様のいけずう（はあと　とか言ってきたので最後

までしてあげた。

もちろんもふもふわさをデスヨ？

気を取り直して、とりあえず今はワカメに慢心してもらうためにも念をいれてワカメから回避し続け、タイガーの竹刀を回収してその日を終えた。

4日目

似非イケメンとは違う本当のイケメン二人組みに出会い自己紹介を受け少々話をしたりした

こちら情報も変わっていなかったので少々安心。

その後遠坂と一悶着があったが気にしない方針でいこう。なんか着実にフラグ値が加算されていってる気がする。

気にしたら負けだ気にしたら負けだ・・・

タイガーに昨日拾った竹刀を渡し、みかんクエストを受注しておいた。これで自室が少し豪華になるだろう

その後も情報との差がないかと学園を歩き回っていると途中でエンカウントしたマーボーが第二迷宮と教会が開放されたことを聞いた。

第二迷宮へ早速いってもよかったが、やはりキャスターの情報も気になる

さてどうしたものか・・・

6 話目 情報収集ではなく間違い探し（後書き）

少しばかりどう展開させるか組み立て中なので今回は短めでありま
す。

いっそのこと肉体派キヤス狐とか作ってやろうとか気の迷いで考え
てたりしちゃう自分がにくい。

キヤス狐は打たれ弱いからいいんだよおお

なんかまっちょしいを思い出してきた・・・

まっちょのござん？

やばい自分を今ほど殺したいときは今までにあっただろうか・・・

いつもながらに駄文ですが読んでいただきありがとうございます・・・

・

ご意見指摘訂正等がありましたら、どうぞよろしく願います○

r
z

7話目 聖堂の中は戦場だった(前書き)

ぎりぎり！

ぎりぎりです！

7話目 聖堂の中は戦場だった

一步踏み込むと、そこは薄暗く外の喧騒から遮断されていた

まるでここが先ほどまでいた場所とは異なる世界にあるかのような印象を受ける

そして中には対照的な赤と青の女性がいた

青崎姉妹だろう

個人的に気になっていたのはなぜ燈子さんアニメ版ではなく、昔のラフ設定状態で出てきたのだろうか

魂の本質に引きずられるという、あれか

それとも青への執着か

後者は本人にいったら殺されますね、わかります

うん。言った場合どうシミュレートしても殺される。黙っておこう

「はあい、ようこそ教会へ。君も魂の改竄しにきたの？」

「ん、お前は確か・・・なんだったかな。
ま、細かいことはいいだろう。被験者が多い分には問題ない。
ようこそ楽園エデンの死角ひがしへ。
魂の改竄にきたのだろう？」

青子さんと燈子さんに出迎えられた。

「どこかの腐れNPC神父から聞いてね。
噂に名高い魔法使いと人形師に会えるとは思わなかったけども。
すまないが魂の改竄というものは正確には理解していないんだ。出
来れば教えてくれないか？」

ちょっとジャブを打ってみた

「へえ。面白いじゃない貴方。」

青子さんは笑ってはいるが威圧感がやばい

燈子さんにもこちらをかなり警戒させてしまったようだ、しかも眼
鏡外してるし

やばい、死亡フラグたてたか、生き残るために必死にセリフをつなぐ

「あ、いや敵対しにきたわけでもないし、これからも敵対する気も
ないよ。

ただ識っていただけ。」

「ふむ……。まあいいだろう。

魂の改竄とは、簡単に言えば君の魂とサーヴァントとの魂をリンクさせる事だ。

マスターの魂の位階が上がれば、それだけ強くリンクさせることもできる。

どうリンクさせるかを決めて、直接魂にハッキングするというわけさ。」

眼鏡をかけ直して説明してくれる燈子さん。イメチェンはまだなんでしょうか……

「まあどうせ魂だけの場所だし、どうでもいいか。

何かあればブッ飛ばすだけだしねー。」

そう飄々という青子さんであった、発言に恐ろしいものが

「まあとりあえず魂の改竄するときは私に頼むといいよ。

そこの人形師はまったく、これっぽっちも、カセットテープほどの役にも立たないから。」

ベーと姉貴に向かってやっていた。険悪というわりにほのぼのしてしまう光景であった

「フン、そういうおまえは眼鏡拭き以下だがな。

またぞろ失敗して、ムーンセルからの苦情がこないよう注意することだ。

まあお前に多少興味はあるから代価によってはしてやってもいいが

な。」

なんという皮肉と失敗談暴露の応酬

あまりに居た堪れないので途中から聞き流したが・・・

「まああまりその魔法使いの力量を過信しすぎないことだ。」

そういつて燈子さんは肩をすくめ話を無理やりまとめあげた

青子さんもこれ以上は無駄といわんばかりにやれやれと言った感じ
でいた

その後青子さんに頼み改竄を行っていたのだが、途中から燈子さん
が参戦してきてちょっと怖いことになった

青子さんがG化させてロストさせた失敗は実は燈子さんが一枚噛ん
でいるかもしれない・・・

だがいろいろ弄くつてるときに燈子さんから魔術師^{ウィザード}について教えてもらった。この魔術^{ハッキング}について軽く教えてもらえるなど収穫はあった。

いろいろあって、このまま部屋に戻り一日を終えたかったがワカメに仕掛けるタイミングを逃すわけにもいかなないので、第二暗号鍵を手に入れた。アリーナへ向かった。

7話目 聖堂の中は戦場だった（後書き）

まだ4日目が終わらないということだ・・・

青子さんと燈子さんとの邂逅

書いてたら相手に興味持ってもらう前に殺されるオチしか思いつかなかった

まじどうしようか悩んだ・・・

ニアミス程度にすることにしました

次はやっとこさワカメ戦です
ナガイナードウシヨウカナー？

相変わらずのg d g d文章力のなさでごめんなさい

ご意見・感想指摘等がございましたらぜひよろしく願いします。

8話（前書き）

あけましておめでとうございます。

相変わらずの文章力のなさでございますがどうぞ今年もよろしくお
願います

8話

そこは深海だった

壁から見える風景にはよくわからない生物たちと岩肌が見えている
しかしのんびり外を見つつ探索という訳にもいかないようだ

「ご主人様、どうやら奇襲は失敗のようですね。奴らがいますね。
この殺気・・・尻尾にピリリとキテマス。
帰ろうにも帰還の隙をつかれるのも癪ですし、とりあえず何とかし
ちゃいましょう。」

「そうだな。罾をしかけられなかったのは残念だけど、とりあえず
一手手合わせといこうか。」

「お氣をつけて、ご主人様^{マスター}」

ワカメ襲来を警戒しつつアリーナの探索を行っていった

隠し通路なども順調に発見して、ワカメが隠したと思われるブツの
ところまできた。

恐るべしキツネの鼻

「チキンな海産物はきつと、こういう場所に物を隠すのが大好きですよ。」

何があるかは知りませんが調べてみましょう！」

そういつて手を伸ばして、触れようとしたのを寸前で止めた

「ちよい、待ち。何か魔術プログラムが走ってる。
危害を加えるようなものではない感じだけど・・・」

「すみません、ご主人様マスター。気づけなくて・・・
危害ではないってことは警報装置みたいなものですかね。
よほどあのチキンな海産物はこれを見られて困るようで
ぶっちゃけ知ってるんですけどねー。」

「いわないお約束だよ。
まあキヤスターが気が付かなかったくらいの魔術プログラムを走らせているんだから、流石は本選に残っただけはあるのか・・・。
それならいっそのことここに罠をしかけるか・・・」

準備が出来たところでわざと作動させつつ、本を手に入れた

どうせ奴らがくるまで時間がかかるので目を通しておこう

黄金の鹿号・・・モルツカ諸島・・・積荷の財宝・・・

これはおそらく航海記録のようなものだろう

ところどころくすんで見えなかった

そしてもう一つ横にあったアイテムも取っておく。

原作では使い道は皆無であった聖者のモノクルだったが、ハッキン
グツールなので役に立つこともあるだろう。たぶん、自信はない。

「チッ、こんなところまで探すなんて随分必死じゃないか。

まあその宝箱についている魔術に気付かずあけて、その場にいるほ
ど間抜けだとは思ってなかったけど。

まあせっかくだけどその本は返してもらおうよ。」

ようやくワカメが来た。驚いたフリをしておく。

「あ、いました！ワカメです！

天誅！鉄槌！天罰必中、いいからそこに直りやがれー！

情報漏洩がどんだけ致命的なミスか、社会的権威もろともテキメン
思い知らせてさしあげましょう！」

流石キャスターさん空気を読まないその性格、涙がでそうです

「うるさいよ・・・！その三流サーバント！」

ちようどいい、ここで僕のサーバントの力を見せてあげるよ。

そして実力の差を見せてやるよ！

やってしまえ！ライダー！」

「うわあ。どこの小物ですか・・・。もうちょっとうちのご主人様
を見習うべきだと思いますよ？」

さあ、こないのでしたらこちらからいかせて頂きますよ？」

そう言って、戦いの火蓋がきられた

初手でキャスターはワカメを直接鏡剣で狙うが

「悪いが、雇い主でね。そう簡単にやられるわけにはいかないんだ
よ。」

—————キンッ

セラフより《警告》アリーナ内でのマスター同士の戦

闘は禁止されています

鳴り響く警告を気にするものなど誰もいなかった

ライダーは鏡剣を銃で防ぎ、その返す手でキャスターとの距離をこじ開ける

そして距離が開けた瞬間

「藻屑と消えな！」

————ドゴンッ

轟音が響いた

先程までキャスターのいた所に煙が立ち込めている

そして煙の中から

”氷天よ砕け！”

キャスターの魔術が走る

ライダーも油断するわけもなく、冷静に銃で魔術を打ち落とした

が、それこそが狙いだった

————カキンッ

魔術を打ち落としたほうの銃を持つ手ごと凍りつく

「なっ」

一瞬驚き動きがとまる。そしてそのタイミングを逃さず畳み掛ける
キャスター

”燃え上がれ炎天！”

————ゴウッ

ナパーム弾のように符が飛んでいった方向、ライダーとワカメ周辺
を燃え上がらせる

（異常じゃないですか……。あの火の大きさ……。）

バク転しつつこちらに戻ってきたキャスター

パンツはまた見えなかった、ちくせう・・・

「これで、やれたらラッキーなのですが。そうはいかないでしょうねえ。」

そう確認するかのように呟くキャスター

それに答えるかのように

「チッ。手を抜くなよライダー!!」

何一方的にやられているんだ!

僕に歯向かったんだ、かける情けなんて一片たりともない。」

炎が突如消し飛ぶ。

ワカメを守ったのか、無傷とまではいかなかったみたいが

「ハハッ。情けなんざ持ち合わせてないっての。アタシにあるのは
愉しみだけさ。」

食い物も男も女も殺し合いも、真っ向勝負が一番気持ちいいんだ。
しけた花火なんざ誰も喜ばない。アンタも悪党なら、派手にやら
かせばいいんだよ。

だから————アレ使わせてもらおうよ！」

そういつつ周囲の圧力が増す

引っ掛かった・・・！

ということはHPはかなり相手はやばいはず？

まあ今はそこはいい

「キャスター！くるぞ！」

「ご主人様！私の後ろから出ないでくださいまし！」

” 野郎共！いくよ！ 嵐の王！ 亡霊の群れ、
嵐の夜の始まりだ！”

ワイルドハント

「残念ながらそうは問屋が卸さないのですよっ」

そう言って不適に笑うキャスター

そしてライダーの宝具が現れ、攻撃しようとしたその時

先ほどの炎天までとは比較にならないほどの巨大な音と炎が宝具とライダーごと包んだ

8話（後書き）

船には機雷ですよね・・・（オイ

まあライダーのスキルの星の開拓者で乗り越えられそうなんですけど

ご指摘・訂正・その他もろもろなにかありましたらよろしく願います！

9 話目

業火に包まれる宝具船。いまだに火は衰えず轟々と燃え盛っている

ライダー自体を倒せなくても、傷を負わすか宝具を無力化できたか・
・・？

いや、何かを忘れている。

いやな気配がする

ライダーの幸運も気になるところだが、それ以外にも何か忘れている

そう考えを巡らしていると火の中から声が聞こえてきた

「ははっは。いいねえ。燃え滾るよ。」

慎二をかばったせいにか、かなりのダメージを与えることには成功したようだ

片手はだらんとして、既に持ち上がらないようである

顔の傷があった部分にも大きな火傷を負ってもいた

「どうやら、ここが正念場らしいねえ、慎二。悪党らしく華やかに散ろうじゃないか。」

「な、何をばかなことをいつてるんだライダー！手を抜いてるんじゃない！」

「あん、手抜きだあ？ そんなのしたに決まってるじゃないかあくまでアタシは副官だからねえ。命令以上の事はできねえっつか。

金を出すのは主人の役目だし？

まあそれに敵さんも見逃してくれるほどお人よしじゃないだろうよ、腹をくくりなっ

ましてやこいつは大詰め、正念場って奴だ。

さあ破産する覚悟はいいかい？ 一切合財、派手に散らかそうじゃないか！」

まだ何か言いたそうなワカメを遮ってライダーが仕掛けてくる

「まさか、この程度で宝具を封じれたと思ってるんじゃないだろうねえ！」

そういいながら、火のついた船を先頭にして機雷源を突破するように突撃してきた

ライダーの船が前へ進むたびに、キャスターの罠が発動し船を沈めていく

しかし突撃陣形を取っているがために旗艦にはダメージがあまり入らない。

序々に距離が近くなってくる

「ハッハハ！アタシの名前を覚えて逝きな！

テメロッソ・エル・ドラゴ！

太陽を落とした女、ってな！」

「流石に出し惜しみはできませんか・・・。
仕方ありません本気見せてあげます！」

呪層界・怨天祝祭。

ダギニ バザラ ダトバン、右掌を左肩に伏、ダキニ アビ
ラ ウンケン、合掌、オン キリカク ソワカ

吹き飛びなさい。」

一方は愚直なまでの突撃艦砲。もう一方は圧殺せんばかりの大火力

飽和攻撃。

交差した刹那、ライダーが満足げに笑ったのを見た気がした

なにやら煙の向こう側で言い争っているようだ

「うん？ 悔しいかって？ そりゃ反吐が出るほど悔しいさ。
一番はじめに契約した時に言っただろう、坊や。
”覚悟しとけよ？ 勝とうが負けようが、悪党の最期ってのは笑
っちゃうほどみじめなもんだ” ってねえ！」

「ひい、な、なんだっ。これ」

慎二もライダーも黒いデータ食いに侵食され始めていた

「聖杯戦争で負けたものは死ぬ。説明は受けていただろう慎二。」

「そんな、あんなのただの脅しだろ！ 電脳死なんてするわけがっ・
・」

「なめてんのかい。そりゃ死ぬだろ。戦争に負けるってのはそういうこった。

それにここから帰られるのは本当に一人だけなんだよ」

「やだよ、そんなこと急にいうなよ。

ゲームだろ？ これゲームなんだろ！？ なあ！

ひい、なんとかしてくれよ」

「そんな簡単にやぶれるようなルール最初からつくらねえって。
でもまあ。善人も悪党も、最後にはみーんなあの世行きだからね、
別段文句いうようなことじゃないだろ？」

どこか悟っているライダー。まるで子供をあやすように慎二に教え込んでいるようだ

「あんだだけ立派に悪党やったんだ。この死に方だって贅沢ってなもんさ。愉しめ、愉しめよシンジ。」

そしてアンタらも容赦なく笑ってやれ。ピエロってのは笑ってもられないと、そりゃ哀れなもんだからな

……さて。ともあれ、よい航海を。

少ししか楽しめなかったのは癪だが、最後にいい戦いができた」

そういつてライダーが黒いデータ食いに覆われてつつもこっちに苦笑して消えていった

そして慎二も・・・

「お、おい！なんで勝手に消えてんだ。助けてくれよ！

あわ。あわわわわ・・・

じゃあおまえ！おまえが助けるよ！

おまえが俺に素直に負けないからこうなったんだ！

責任とって助けるよ！

ひ。消える・・・。

やだ。と、友達だろ！ 友達だったんだろ！

助けてくれよお

消える、うそだろ

なんでリアルな僕まで死ぬってわかるんだ・・・？

うそだうそだ、こんなはずじゃ。助けるよお

助けてよお！僕はまだ8歳なんだぞ！？

こんなところでまだ死にたくな————」

消えていった

「流石にあそこまでの命乞いを見てるとどうも気分が優れないな。
遠坂が原作でいったようにただの時間の無駄にしかないが・
・」

「そうですね、敗者は敗者らしく華やかに散るべきですのに。
流石はワカメといったところでしょうか？」

先ほどの激しい戦いのため肩を息をしていた

ライダーの話を聞いている間もずっと言葉を紡ぐこともせず呼吸を
整えて警戒していたキャスターがそう返してくれた

※セラフから《警告》及び《ペナルティ罰則》警告を無視した違法

な戦いで勝利したため罰則として今後二日間アリーナへの立ち入りを禁止します※

「げ、こうなるのか。。。」

「あちゃーやっちゃいましたねえ。二日ってことは今期はアリーナ禁止ってことですか？

ということは、今から急いで第二暗号鍵を手に入れないと私たちも不戦敗ってことになりますよ。」

「はあ、休みたかったが・・・

キャスター、疲れているかもしれないがもうひと踏ん張り頼む。」

「はい。ご主人様喜^{マスター}んでついていきます♪」

そういつてこの戦いの場を離れた

最後に一度決戦の場を見つめ、そしてもう振り返ることはなかった

9 話目（後書き）

作中で使った

ダギニ バザラ ダトバン、右掌を左肩に伏、ダギニ アビラ ウンケン、合掌、オン キリカク ソワカ
はマニアナ人は当然、ある程度知っておられる方もおられるかもしれないかもしれませんが伏見稲荷の真言です。

本気なら使わせてみようかなーと。オリ技乙ですね、ほんとに。。。常世咲き裂く大殺界はHP30%以下発動の毒持ち魔力攻撃だから決戦には向かないなーとかそんな理由で却下されました

駄文でございますが読んでいただきありがとうございます

ご指摘、ご意見、今後の展開どうなったら面白いんじゃないかなものまでお気軽に突っ込んでください（n・v・）n

どうぞよろしくお願いしますorz

追記。忘れてた。

いやな予感するってのはエル・ドラコさん火船戦法使ってくる人なんですよね、確か。史実で。

そのネタ突っ込むの忘れてた（n・v・）n

ああそんなことがアッタンダー程度での解釈をお願いしますorz

10 話目（前書き）

設定を煮詰めたり、その設定を書き起こしてたりで少々更新期間が開きました。申し訳ないですorz

10 話目

ワカメとの戦いが終わり、その後すぐに第二暗号鍵を入手し、みか
んも回収をしておいた。

危ない危ない、みかん忘れたらタイガークエストを完了できないと
こだった・・・

しかし二日もアリーナ禁止を食らったら正直することがない。

それに他の参加者にもいらない警戒心を与えたりなどして、史実が
変わるのが一番面倒くさい。

戦いの前の時と同じようにワカメの情報を入手しつづけるフリとい
うことにしておこう。うん、そうしよう

ちなみにあの後、携帯端末から1回戦勝利というメールが送られて
きた。

そのメールによれば決戦日にはエレベーターに行つて最下層にいか
ねばならないようであった。

しかしアリーナ禁止になるとは思わなかった、いやむしろ能力制限
とかきたらもっと厄介ではあったのだが

むしろトワイスがキャスターの能力に違和感を覚えて能力を泳がせ

ているとか？

その可能性もあるのか・・・

いや、そんな改竄するほどの権限はなかったはずだし、そんなことをすれば聖杯側から異物認定を受けかねない
とりあえずは切り札はあまりみせないようにしつつ、勝ち進むことにしよう

そんなことを敵が許してくれるとは到底思えないが

それに負けて死ねば、そこで終わりで次の世界というわけだろうがおそらくこの初回の世界はチュートリアル世界だろう
次の世界がこのようなルールに縛られた戦いをさせてくれるわけでもないし

できるだけここで経験を詰んでおくのが吉

でも何にせよアリーナいけないのは暇D A

そんなことをキャスターと念話で話しつつ、シンジ（笑）の情報を集めるフリをしつつ他の参加者の情報を集める二日間だった。

最終日

似非神父に話しかけられ、そのままエレベーターのところへ向かった。

「ようこそ、決戦の地へ。」

といいつつも勝ちが決定しているものに特に意味のあるものでもないが・・・

これも通過儀礼だ。大人しく従ってくれたまえ。

2回戦以降の戦いに望む覚悟があるのなら、暗号鍵を扉に翳し、その覚悟を持って扉を開くといい。」

言われるでもない。

そう思いつつ扉に暗号鍵を翳し、地下に向かった。

地下に降りている間。相手側のところは何もなかった。

ただ空洞で、それがどこか虚しかった。

「戦いとはそういうものです。ご主人様^{マスター}。

ただ我々は生き残り、力を付ける為に勝ち続けなければならないだけです。

今はそれだけでいいのです。」

キャスターの優しさが心に染みる

一応、割り切ったつもりではいたのだが心の底では納得できていなかったようだ。

とりあえず見抜かれたことが気恥ずかしかったので、誰もいないことをいいことにキャスターをハグして

「ありがとう。キャスター。お前が傍にいてくれてよかった。」

と仕返しばかりに耳元で囁いたら面白いくらいに固まっていた。

このようなストレートな反応に弱いようだ。

スイーツ英霊のくせにっ

その後反応がなかったので、エレベーターが下につくまで尻尾をさわさしていた。

もちろんハグしっ放し余裕でした。

あ、胸の感触はなかなかのお手前でした・・・

ガゴン・・・

エレベーターが一番下まで降りたようだ

名残惜しかったが、離れ決戦場へと歩き出す

キャスターも再起動が完了し、自分の前に立ち決戦場へと進む

決戦場は沈没船の甲板の上だった。

ライダーのためのステージといっても過言ではないだろう。

ただその相手がいないことを除けば。

「^{マスター}ご主人様？」

「何度もすまない。だが大丈夫だよ。」

前を向いて答える

しばらくすると儀礼的なものが始まり、

?

Sword, or Death

With What in your hand. . .

Flame dancing, Earth splitting,
Ocean withering

Winner Caster win by default

この文字が流れ、1回戦の終わりを告げた

10 話目（後書き）

みかんをタイガーに渡しタイガーライトを手に入れた $(n \mid \forall i) \quad n$
とりあえずは1回戦まで終わりましたっ

ここまで読んでいただきありがとうございます！

まだまだ続きますがっ。主に自信の技量 u のためにつ

ご感想。指摘、意見などありましたらぜひよろしく願いしま
す $(n \mid \forall i) \quad n$

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6523p/>

Dorp! Trap? Trip!

2011年1月12日20時23分発行